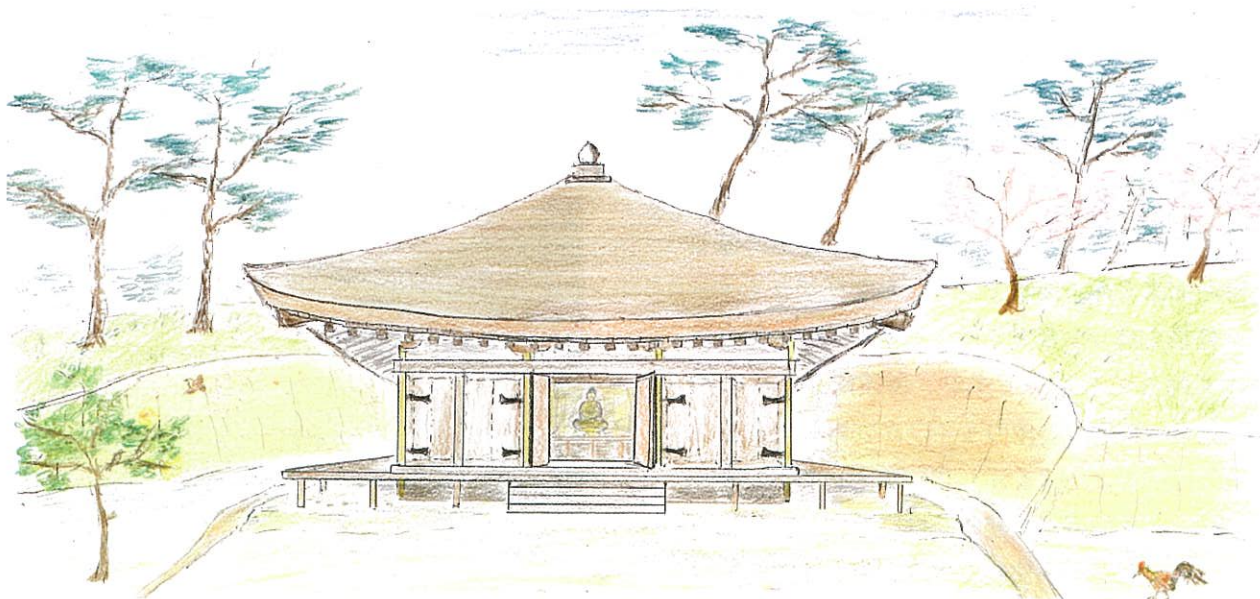


阿岐のまほろば

Vol. 41

へいあん たか や さと あ み だ どう
平安の高屋の郷にも阿弥陀堂？

ひがしだ とう
東田遺跡(高屋町郷)



東田遺跡出土掘立柱建物跡復元想像図

東田遺跡は、高屋町郷に所在する弥生時代から平安時代にかけての遺跡です。

au基地局の工事にともなって平成21年6月から7月にかけて発掘調査を実施しました。

この遺跡は、谷が入り組み、低丘陵が広がる郷地区の中で、最も高い標高250mほどの丘陵に広がっています。調査した場所は、丘陵中腹の東南に向いた緩やかな斜面で、標高は240～244m、面積は約270㎡でした。

調査の結果、弥生時代後期の^{たてあなじゅうきよあと}竪穴住居跡3～4棟、古墳時代の^{ほったてばしらたてものあと}段状遺構と掘立柱建物跡、そして平安時代後期の大型の掘立柱建物跡の一部が見つかりました。

ここでは、平安時代の建物跡と弥生時代の遺構を中心に見ていきたいと思います。

さて、発掘調査で見つかった平安時代の遺構は、1棟分の建物跡です。

調査範囲からは、柱穴が6個見つかりましたが、

その構成は、建物の最後列に当たると思われる4個と、その前面側の2個です。柱と柱の間を「間」と呼びます。建物の規模を表現するとき「○間×○間」と表記します。柱穴が4個ですから、この建物跡の最後列は、3間となります。この建物跡は、その柱配置に大きな特徴が見られました。両側の1間に比べて、中央の1間が広いのです。両側の柱間が2.4mずつなのに対して、中央の柱間

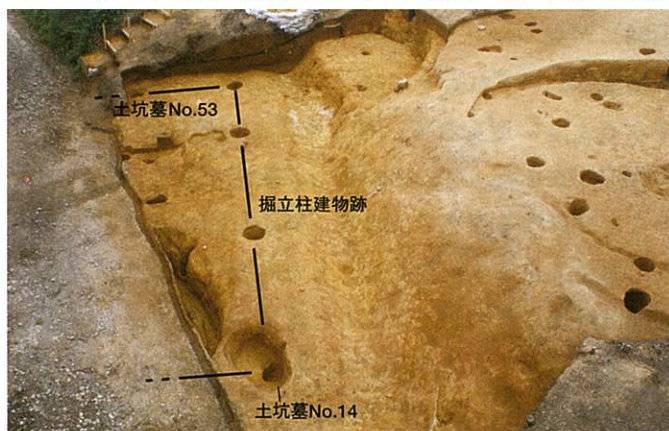


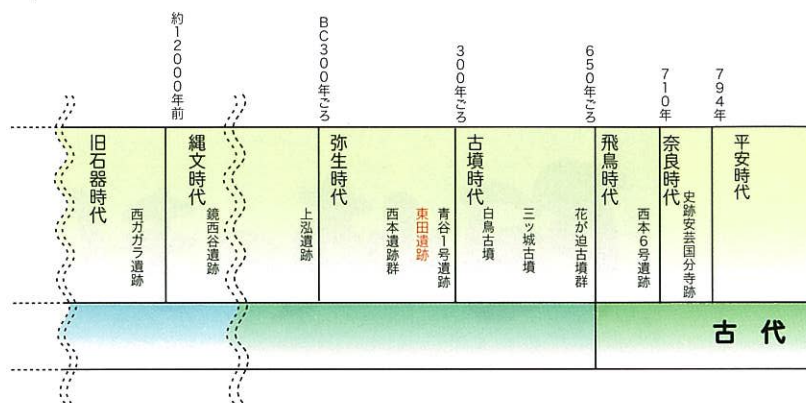
写真1 掘立柱建物跡全景(東から)

は3.2mとかなりの差があります。これは当時の寸法でいえば、両側が8尺、中央が1丈に相当します。出土遺物から、この建物跡は平安時代後期のものと考えられますので、現存するその時期の建物と比較すると、東田遺跡で見つかった建物跡の用途を推測することができます。

梁間が3間で、しかも中央の1間が広いという特徴を持つ建物は、広島大学の三浦正幸教授のご教示によれば、1丈四方の母屋の周囲に1間ずつの底が取り巻く1間四面庇付建物と考えられ、社寺建築、特に平安時代後期に流行した阿弥陀堂建築の可能性が高いということでした。浄土思想における阿弥陀堂は、建立した人を極楽浄土に導く阿弥陀如来を祀る建物であり、かなりプライベートな性格を持つお堂です。岩手県平泉の中尊寺金色堂も阿弥陀堂建築ですが、奥州藤原三代の清衡・基衡・秀衡の3体のミイラが安置してあることは、そのことをよく示しています。

しかし、東田遺跡の建物跡は、建立された時期がやや古い点、礎石建物ではない点、寺院と特定できるような遺物が出土していない点から、これが阿弥陀堂建築であると断定することはできません。ただ、立地が周辺で最も高い位置にある丘陵の奥まった谷戸を見下ろす高台に位置する点は、他の阿弥陀堂建築、白河阿弥陀堂（福島県）や富貴寺大堂（大分県）などにも共通します。また、わずか1点のみとはいえ、瓦が出土している点は、神社よりもお堂であることを示唆するものと思われます。

そして、調査ではさらに興味深い遺構（No14、No53）が見つっています。（写真1）これらは中世墓で、いずれも先に述べた建物の柱穴の跡に重なるように造られていました。この建物跡が、阿弥陀如来を祀っていた建物だと仮定すると、このことは単なる偶然ではなく、何か意図があるように思えてきます。墓が造られた時点では、既に建物は解体されていたと思われますが、墓を造った人たちは、そこに阿弥陀堂の柱が建っていたことを鮮明に記憶していたのではないのでしょうか。つまり、その柱穴の跡に自らや親族の墓を造るこ



とで、阿弥陀如来との縁によって死者が極楽へと導かれることを強く希望していたと推測することができますと思うのです。



写真2 土坑墓No.53 短刀出土状況（東から）

2基の墓が、柱穴の跡に設けられたのが上記の理由からだすると、合理的に説明をすることができます。そして、これは、建物跡が阿弥陀堂建築であったことの間接的な状況証拠ともいうことができるでしょう。

この阿弥陀堂と思われる建物を建てた人々がどのような人々であったのか、現在では知る由もありません。ですが、現時点で明らかになっていることを総合して少しでも建立者の実態に迫ってみましょう。

平安時代に成立した『和名類聚抄』には、賀茂郡内の郷名として「賀茂郷」「志芳郷」などと並んで「高屋郷」の名が見えます。「郷」とは、古代の行政単位の一つで、郡衙の支配下にありましたが、現在の「郷」地区がその名で呼ばれていることは、かつて、この一帯が高屋郷の中心であったことを示すものと思われます。

郷地区（江戸時代の郷村）は、南の白鳥山を南端に、入野川を挟んで東田遺跡のあるあたりまで南北に細長い地区です。通常、村の境界は大きな

1192年	鎌倉時代 東田遺跡	1333年	室町時代 御園手城跡 白山城跡 頭崎城跡 槇山城跡	1573年	安土・桃山時代	1603年	江戸時代 旧木原家住宅 四日市遺跡 旧石井家住宅	1868年	明治時代 小谷焼窯跡
中世				近世		近・現代			

川などで区切られることが多いのですが、ここではその川を渡って東田遺跡がある丘陵まで取り込んでいます。ここにも何らかの意味があるものと思われる。それが何を意味するのか明らかではありませんが、東田遺跡を形成した人々が、当時高屋郷の中心的存在であり、彼らの屋敷地がある地域を含めたため、川を越えてまで「郷」と呼んだ可能性が考えられます。

また、東田遺跡出土の遺物が示す中心的な時期は、11世紀後半から12世紀前半にかけてだと思われます。一方、入野川の南、溝口に所在する溝口4号遺跡は、中世高屋保の荘園領主の拠点が置かれた遺跡と考えられていますが、13世紀後半に成立したことが明らかになっています。

これらの乏しい情報から、大胆な推理を行えば、東田遺跡の南側の谷は、古代の高屋郷の有力豪族、例えば高屋郷司などの本拠地であり、東田遺跡の建物跡は、その豪族によって建てられた阿弥陀堂だったのではないのでしょうか。

12世紀のうちには、お堂は解体されたものと考えられます。移築されたものか、廃絶してしまったものか、明らかではありません。

12世紀後半には高屋郷は、国衙領から朝廷の役所の一つ、大炊寮の費用を賄う便補の保に指定され、大炊寮領高屋保が成立します。13世紀後半には高屋保の政治的中心は、溝口4号遺跡に移っています。

この変化がどのような政治情勢の下で起きたのか明らかではありませんが、この時期は、源氏と平家に代表される武士の時代の到来や、有力農民層の武士化など、社会が大きな変革を迎えた時代です。東田遺跡の住人はこうした歴史の荒波に呑みこまれて姿を消してしまったのではないでしょ



写真3 調査区全景（西から）

うか。

東田遺跡の調査は、平安時代の建物跡の全容さえ見ることができないほど小規模なものでしたが、その成果は平安時代の高屋が直面した歴史の大きなうねりを想像させる意義深い調査だったといえるでしょう。

高屋町の弥生の村

高屋地域では、今から約2000年前の弥生時代中期ごろから、人口が増加し始めます。後期にはピークを迎え、小高い丘陵全体を利用して、大規模な集落があらちこちらにつくられました。それは、浄福寺1号遺跡、浄福寺2号遺跡をはじめとする高屋ニュータウン遺跡群（高屋町高美が丘）、西本遺跡群（高屋町杵原）などの発掘調査からわかっています。

東田遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居が3軒見つかりました。そのうち、最も形が残っていたのは、No.2遺構です。（写真4）壁溝と呼ばれる溝が西側から南側にかけて二重になっていることや、土層観察などから、1回以上の建て替えが行われたことがわかりました。1度目の住居が長径約6.0m、短径約5.6mの楕円形で、2度目は直径約6.9mのほぼ円形の住居です。柱も7本から9本へと本数が増え、一回り大きくなったことがわかります。出土した土器に時期差が見られないことから、住居は短期間のうちに建て替えられたと考えられます。

この時代の竪穴住居は、周囲の平野部分が見渡せる丘陵の頂部やそれに近い緩やかな斜面に建て



写真4 竪穴住居跡 (No. 2) 全景 (西から)

られることが多いのが特徴です。これは冬の間、北風を避けるために頂部からやや下がった所に建てたとされています。また、斜面を掘って出た土を埋めて土地を広げれば、労力が半分ですむからということも考えられます。東田遺跡でも、住居は調査範囲の東側の斜面に集中していて、平坦な所には建てられていません。

ではなぜ、弥生人は水田の管理や水の確保に不便な丘の上に暮らしたのでしょうか？理由の一つとして、ムラ同士で激しい争いが行われるようになり、敵から身を守るために見晴らしの良い場所

を選んだことが挙げられます。西条町の^{すけひら}助平2号遺跡（西条中央8丁目）や東田遺跡と同じ高屋町の溝口4号遺跡では、^{かんごう}環濠の跡が見つかっており、東広島でもムラ同士の争いがあったことがわかっています。

やがて弥生時代が終わり古墳時代になると、高屋の人々は丘を下り、別の場所へ移っていったようです。

お知らせ！

文化財センターは、東広島市出土文化財管理センター（下記を参照してください）内へ移転しました。展示コーナーもありますので、ぜひ一度見に来てください。



東田遺跡位置図 (1:25,000 白市)

(財)東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 41

発行日 2011 (平成23) 年3月31日

発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター

編集 東広島市河内町中河内651-7

TEL 082-420-7210 〒739-2201

<http://akinomahoroba.or.jp>

印刷 大東印刷株式会社

東広島市西条下見五丁目8-17

